

(5) だいず

ア 各病害虫の防除

さび病

紫斑病

白絹病

炭疽病

べと病

モザイク病

アブラムシ類

莢実害虫(カメムシ、ダイズサヤタマバエ、チョウ目類)

タネバエ

ハスモンヨトウ

コガネムシ類

ハダニ類

フタスジヒメハムシ

センチュウ類

ア 各病害虫の防除

【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

さび病

(耕種的・物理的防除)

- 1 前年に被害茎葉を処分しておく。
- ※多発すると急激に落葉し減収する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を散布する。

紫斑病

(耕種的・物理的防除)

- 1 健全株から採種する。
- ※若莢期に雨が多いと発生が多くなる。
※ほ場の残さは全て除去埋没する。
※茎、葉、莢にも発病する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤で種子消毒する。
 - 2 開花期から2～3週間後と3～4週間後に、薬剤を散布する(1回のみ散布の場合は、後期に行う方が有効である)。
- ※種子粉衣は根粒菌と併用してもよい。

白絹病

(耕種的・物理的防除)

- 1 消石灰を施用して土壌pHを矯正する。
 - 2 数年のローテーションで輪作する。
 - 3 深耕する。
 - 4 発病を早期に見出し、発病株は周囲の表土と共に除去する。
- ※転換畑でも連作に伴い発生が増加する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を散布する。

炭疽病

(耕種的・物理的防除)

- 1 健全株から採種する。
- ※主に種子伝染する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病初期に薬剤を散布する。

べと病

(耕種的・物理的防除)

- 1 密植を避けて風通しを良くする。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病初期から薬剤を散布する。

モザイク病

(薬剤防除)

- 1 下記の[アブラムシ類の防除](#)を行う。
※病株には褐斑粒を多く生じる。

アブラムシ類

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生初期から薬剤を散布する。

莢実害虫(カメムシ、ダイズサヤタマバエ、チョウ目類)

(薬剤防除)

- 1 開花7日後から7～10日間隔で数回、莢によくかかるように薬剤を散布する。

ダイズサヤタマバエ [農薬登録情報](#)

マメシンクイガ [農薬登録情報](#)

シロイチモジマダラメイガ [農薬登録情報](#)

カメムシ類 [農薬登録情報](#)

タネバエ

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 乾燥種子に薬剤を処理しては種する。
- 2 薬剤を処理する。

※鶏ふん等有機質の土壌施用はタネバエの発生を助長する。

ハスモンヨトウ

(耕種的・物理的防除)

- 1 早期発見に努め、卵塊や分散前の若齢幼虫を捕殺する。
- 2 施設などでは開口部に防虫網を設置し、成虫の侵入を防止する。
- 3 露地栽培では、[共通防除の章の性フェロモン剤による害虫防除の項](#)も参照する。
- 4 防除剤は別表及び[共通防除の章のBT剤による害虫防除の項](#)によるが、中齢幼虫以降になると薬剤の防除効果が著しく低下してしまう。早期発見、早期防除に重点を置く。常発地ではフェロモントラップを設置するなどして発生消長を確認しながら幼虫の防除を行う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 交信かく乱剤を活用する。
- 2 BT剤を散布する。
- 3 幼虫が小さいうちに薬剤を散布する。

コガネムシ類

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 成虫の飛来が多く被害が著しい場合は、開花前から着莢後に薬剤を散布する。

ハダニ類

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生初期に薬剤を散布する。

フタスジヒメハムシ

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 乾燥種子に薬剤を処理しては種する。
- 2 下記薬剤のいずれかを処理する。

※成虫は、大豆の葉、子葉、莢、茎などを食害する。幼虫は根粒内に潜入して内部を食害する。老熟するまでに数個の根粒を食害するので、多発地では大豆の生育が悪くなる。

センチュウ類

(耕種的・物理的防除)

- 1 連作を避ける。
- 2 有機質の施用に努める。

※主にダイズシストセンチュウが寄生する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 [共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。